慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	仏蘭西経済学に於る価値論の発達（五、完）
Sub Title	
Author	津田, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.11 (1924. 11) ,p.1622(84)- 1635(97)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19241101-0084

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

に一般的富を增加せしむる場合がある。例へば各種の科學的實驗の場合の類である。茲に於てロッシャーは曰く「私人經濟は、勞働の生產力を測定するに其の生產物の交換價値を以てし、一般經濟は其の使用價値を以てするものにして、國民經濟は其の中間の位置を占むるものである」と。(W. Roscher, Grundlagen der National-ökonomie, buch I, Kap. 2, s. 150.) 併し如何なる見地より本題が考慮せらるゝを問はず、多くの最近經濟學者は、等しく非物質的生產物の創造をも生產的勞働の部類に數ふるものである。而して吾々が其の論據を高めれば高める程、夫れ丈け或る一定の勞働の生產效力を評價する場合に困難の程度が增加するのである。去れば吾々はロッシャーと共に「一國民が偉大であり、自由であり、又聰明であればある程、夫れ丈け個人の利得は其の國民及び世界の利得と一致する傾向が强くなるのである」と斷言し得るのである。(Roscher, Grundlagen der National-ökonomie, S. 151; Palgrave's Dictionary of Political Economy, 1918, vol. III. pp. 218-219.)

右は、所謂生產的勞働說に對して現代經濟學者が與へたる批評の一である。次に私は、同樣に所謂生產的消費說に對する彼等の批評を聞かう。(次號完結)

佛蘭西經濟學に於る價値論の發達(五、完)

津田誠一

二十

前叙の價値構成の諸條件にして一旦完備具發する時、吾人は什麼の理由に基きて此一物を他の一物よりも或は高く或は低く品騰するや。吾人が他物との比較に於て一物に賦與する重要の程度換言すれば評價の標準は那邊に之を求む可きや、最終效用說は爰に擡頭する。抑々一物の種屬全體に就きて觀たる效用と此物の各個の單位に關して考察したる效用との間に峻嚴なる區別を設け、舊來の效用說と稀少性說とを一體に融合して價値論上に一新紀元を劃し得たる此學說は、明かに其淵源を英墺兩國に發し Paul Leroy-Beaulieu を始め佛蘭西の學徒が之を紹述せるは、至極最近の事柄に屬する。乍併該學說の豫備前提と看做す可き若干の思想は必ずしも然らず。其第一は欲望飽滿の法則 loi de satiabilité des besoins 換言すれば、凡ゆる欲望は其强度に於て有限なりと云ふ見解である。一定量の麵麭は能く吾人の饑餓を癒す可く、一定量の水は以て吾人の渴渴を癒するに足らん。凡そ一定の時期に於る個々の欲望は其對象たる財貨を攝取する事多きに從つて次第に其强度を減退し、遂に飽滿の點に達して消滅するものである。其第二は欲望雜多の法則 loi de variété des besoins 換言すれば、欲望は其數無限なりと云ふ見解である。個人的例外は姑く措き正常の人間に就きて觀察する時は、苟くも現世に生を享得せる以上此生を可及的幸福に且つ恒久に持續する爲に變轉極まり無き欲望を或は創生し或は再現する事が人類自然の通有性たるは、古往今來常住不易の事實である。第三は欲望代位の法則 loi de substitution des besoins であつて、此は前揭二法則の當然の結果である。即ち一方に於て各個の欲望は其飽滿點に接近するに從ひ漸次其强度を減退するの事實あり、他方に於て人間の欲望は無限に變轉するの事實あり、爲に或は現在感受せらるゝ强度に從ひ或は之を充足するに必要な

る費用の大小に鑑みて、一の欲望は他の欲望を驅逐し是れに代位するのである。饗宴は飲酒に始まり陶醉の境に入るや盃を納めて食欲旺盛と爲り宴果てゝ茶菓を嗜好するが如き、又肉價昂騰すれば菜食に甘んじ絹布不廉なれば棉服を擇ぶが如き、彼此皆這般の事實を證明す可き適例である（Joseph Rambaud: Cours d'économie politique, t. I. pp. 52-55; Gide: Principes d'économie politique, 16e édit. pp. 44-50）。要約すれば、「各人が特定の欲望に滿足を與ふる爲に支拂はんと思惟する所の犧牲は、此欲望が愈々益々充足せられ其强度が徐々に消滅し行くに從つて減少する。然る時は此欲望は相異る滿足を要求する所の他の欲望に依り驅逐せらる。若し斯かる欲望の正常の滿足が生産物の稀少なるが爲に過大の費用を要するに於ては、各人は例外的消費を試み一層費用少き他物を以て是れに代位せしむ可し」と云へるのが欲望代位の法則の眞髓である（Leroy-Beaulieu: Traité théorique et pratique d'économie politique, 5e édit. t. I. p. 112 et 662, t. III. pp. 38-40; Colson: Cours d'économie politique, t. I. p. 183 et 184）。

最終效用說の功績は此欲望代位の法則を價値問題の解明に適用せる所に在る。佛蘭西の學徒が此學說に啓示を負へる主要なる思想を概括すれば次の如くである。其第一は價値有限 Valeur-limite の觀念である。凡ゆる欲望の最高の强度は之を充足する物件の價値の極點に對應する。其過剩と共に飽滿は開始し一切の追加分量は其價値の低落を促進し、嘗て必要なりし物も爰に無用と化する。畢竟「一生産物の價値は、其物の豐富なる事が最も緊要なる欲望滿足の程度に對應する點を超過するに至るや否や、著しき低落を惹起す可し。是れに反して同一生産物の價値は、其分量に制限あるが爲に其對應する欲望中の最も緊要なるものが未だ充足せられずに放棄せられある時は、莫大なる割合を以て騰貴を惹起す可し」と云ふのである（Leroy-Beaulieu: op. cit. pp. 41-43）。吾人は爰に需要の分量を支配し價値の變動を左右する力を見る。第二は享樂遞減 moindre jouissance の觀念である。例へば穀物の如くに一商品が幾多の用途に適合する時は、其最も緊要なる欲望に役立つ最初の定量は、餘分の欲望に對應する爾後の定量よりも、耕作者に對して一層大なる使用價値を有するであらう。斯かる主要の諸欲望に備ふ可く其最初の定量を保留したる後に於ては彼れ耕作者は、其手放す事を肯んずる所の穀物を評價するに、該穀物が彼れに獲保す可き所の輕減せる享樂の程度を以てするであらう。隨つて彼れの基本の欲望を充足するに缺く可からずと判斷せられたる貨物の全量を讓渡するが爲には、生産者は一層有利なる對價に依て誘はれねばならぬ。享樂遞減の觀念は斯く胸中に人知れぬ打算を秘せしむる事に依つて供給の分量を決定し、價値の頻々たる變動を一層良く了解せしむるものである（Leroy-Beaulieu: op. cit. pp. 35-38; Gide: op. cit. pp. 67-71）。第三は即ち無差別の法則 loi d'indifférence である。是れあるが爲に購買者は一物の定量を購入するに當り、彼れが之を適用し得可き種々なる用途の間に區別を設け、此區別に準じて購買價格に差等を附するの要はない。一旦市場が過剩に陷るに於ては、飽滿の感受せられ始むる點以上に提供せられたる同種貨物の全量が、價値の減少を蒙る。最緊要の欲望充足に不可缺なる部分と雖尙且つ然りである。而して假令穀物の最初の定量が其追加分量よりも總ての消費者に取つて效用大なるにせよ、購

買者は毫も此第一の定量に對して第二の定量に對するよりも一層高き價格を支拂ふ可き理由を有せざるものである（Leroy-Beaulieu: op. cit. pp. 34-36,—Turgeon: La Valeur d'après les Économistes Anglais et Français, pp. 438-442）。

價値は主觀的效用に依つて定まる。此效用は吾人が所有する物の各單位に依りて異る。然るに欲望の强度は是等單位の增加するに從つて減少するものなるが故に、各單位の效用も亦た是れに伴ひて漸減す。而して是等の中、最終の單位換言すれば最後に充足せらるゝ欲望に對應し隨つて最小の效用を有する單位の效用が、他の總ての單位の效用を決定し且限定すと云ふ最終效用說の論證は如上の思索の上に其基礎を有するものにして、佛蘭西最近の諸學者亦一般に之を認容してゐる。現代斯學の最高權威と許容せられ、價値論上に於ては折衷說の支持者なりと稱せらるゝ Charles Gide すら、最終效用說は價値の複合原因を把握せるものなれども一見唯一原因を捕捉せるかの速斷を招く惧れありと爲すの外、何等根柢より之を覆滅す可き有力なる駁擊を提示してはゐない（Gide: Principes d'Économie Politique, 23e édit. pp. 61-63）吾人は唯だ此項を閉づるに當つて爰に無差別の法則と云へるは、例へば英吉利の Chapman の如き一派の論者が、「代用の法則」と「限界效用均等の法則」と及び「無差別の法則」とを異名同則なりと解釋せるとは其軌を異にし（Chapman: Outlines of Political Economy, p. 44）、寧ろ一定の時同一市場に於て同種の貨物に關する價格は唯だ一あるのみと云ふ、Stanley Jevons の所謂無差別の法則と同意義なる事を附言して誤解の招致を防ぎ度いと思ふ（Jevons: Theory of Political Economy, 4th ed. p. 91）。

評價の眞態は斯くの如し。而して此評價は決して恒久不變のものにあらず。使用價値も之を基礎とする交換價値も共に不斷の變動を免れぬ。是れ評價の窮極の根柢たる主觀的效用自體が固定的のものにあらざる當然の結果である。然らば價値の變動に關する諸家の見解は如何。

二、

通說に從へば價値の變動を支配するものとして從來反覆傳唱せられたる需要供給の作用は、全然之を無視する事は不可能である。乍併「價値は需要量に正比例し供給量に反比例して變動す」と云ふ言句を以て、價値變動の全問題を解決し去れるものと思惟せる所謂舊來の需要供給の法則は、近時、需要供給は洵に價値の高低に影響す可きも、然も亦た價値の高低が逆に需要供給に影響する事も眞なりと云ふ事實に想到するに及んで、著しく其面目を一新せざる可からざるに至つた（Cawès: Précis du Cours d'économie politique, t. I. n° 191, p. 184）。

諸家は先づ Rossi が所謂需要供給の法則は價値の創生要素にあらず唯だ其調整要素のみと云へる言說を繼承して、價値の構成因と價値の變動因とを峻別し、以て該法則を過大に重視するの危險を嚴戒すると共に、進んで需要供給の背後に潛在する力の洞察を試る。乃ち一物の需要を決定する窮極の力は、其物の對應する欲望の範圍及び强度と、並に各人が之を獲得する爲に支拂ふを肯んずる犧牲とである。若し其滿足を購ふの費用が餘りに大なりと判斷せらるゝに於ては、需要は高價に過ぐる生產物を離れて一層有利なる代用物に轉ずるであらう。一方一物の供給を決定する力は、市場の現存高及び各占有者の手放さんと欲する價格に存すれども、此兩者は亦たそれ自身屢々生產の出費に依賴するも

のである（Colson: Cours d'économie politique, t. I. p. 194 et 262; Leroy-Beaulieu: op. cit. t. III. pp. 68-69; Beauregard: Elements d'économie politique, pp. 194-195; Villey: Principes d'économie politique, 3e édit, pp. 211-220; Jourdan: Cours analytique d'économie politique, pp. 445-453, etc.)。

此生産費の問題に關しては諸家は英國古典學派の先蹤を追隨し、無限に再生産に能はざる物又は全然再生産し能はざる物と、經費の如何を問はず兎も角無限に再生産し得る物との間に、區別を設けて考察する。第一に藝術品の如く再生産不可能なる物に在りては、其價値の變動は生産費に無關係である。其は好事家の之を手に入れんとする願望と、占有者の之を手放す事を拒否するの意志に依つて支配せられる。唯だ獲得の困難のみが之を斷念して他に轉向せしむるのみである。即ち此場合に於ては需要供給の作用は專制的且つ絶對的である。其は代位の法則に依り此過大の犧牲を要求する欲望滿足に代る可き新たなる對象を發見する以外には、何等の制肘を蒙る事無し（Leroy-Beaulieu: op. cit t. III. pp. 70-73; Cawès: op. cit. t. I. n° 194, p. 187; Levasseur: Précis d'économie politique, pp. 178-179）

第二に自然的には再生産可能なれども、國家の獨占事業たるが爲に自由に私人の再生産を許さゞる物、例へば烟草、鐵道の如きに於ては、需要供給の作用は常道を逸する。即ち競爭の發生する餘地無きが故に、價格は賣手の專斷を以て其獨占事業より最大可能の收益を擧ぐるが如くに、決定せられる。此場合一生産物又は一勤勞に課せらるゝ價格は多少生産の經費を超加し、著大なる收益の增加を得せしむるものである。但此獨占價格と雖全然獨占者の貪婪なる意志のまゝに無限に釣上る事は不可能である。蓋し買手の意向を斟酌せざるに於ては需要の減退を惹起し、收益意の如くならざる可きを以てゞある（Colson: op. cit. t. I. p. 217）。

最後に幾多の再生産可能なる物に就きては、其價値は需要供給に依賴すれども、然も是等諸物は自由競爭の支配下に在るを以て、價値の變動は生産の經費に向つて牽引せられる。供給は需要に、需要は供給に投合せんとする交互作用に依り不斷に一高一低の律動を描きつゝ、無限に再生産可能なる貨物の價値は自由市場に於ては、其原價 prix de revient に引寄せらるゝものである。而して此價値を決定する傾向を有する所の生産費は、消費者の需要全體に滿足を與ふるに缺く可からざる供給量全體の生産に參與せる者の中、最も不利なる條件の下に生産しつゝある生産者の生産費である。即ち學術的に表現すれば限界生産費である。此理は工場製品の如く不變の費用を以て、再生産し得る物に關しても、肥瘠其度を異にする土地の耕作物の如く、遞增する費用を以てのみ再生産し得る物に關しても同斷である。而して假令一部の生産者が其生産物の價値を以て其生産の經費を償ふ能はざるが爲めに遂に落伍する事ありとも、此は限界生産費が價値を決定する傾ありと云ふ常規を攪亂するものにあらず。蓋し其は此落伍者の生産物が最早市場に必要ならざる事を證明するに外ならざるが故である（Leroy-Beaulieu: op. cit. t. III. pp. 73-75, et 78-83; Colson: op. cit. t. I. pp. 196-216; Cawès: op. cit. t. I n° 509, pp. 469-470; Levasseur: op. cit. pp. 179-181; Courcelle-Seneuil: Traité d'économie politique, t. I. p. 285）。

但自由に再生産し得る諸物の價値は生産費に依つて決定せらるゝ傾向ありと云ふも、其は人

が是等諸物の所有に對して賦與する鑑賞の程度の最高點を、踰越せざる範圍内に於ての事である。然らずんば價格の暴騰は消費者をして他に去らしめ、其生産は所詮最も有利なる條件の下に在る生産者にのみ限局せられるであらう。需要に依つて表現せらるゝ一物の效用こそは、常に必ず價値の決定的條件を爲すものである。又其故に價値の凡ゆる變動は密接に人類の欲望に依賴する。是れ佛蘭西流の見解の特徴である。

斯くて畢竟現代通説の歸趨する所は、需要供給の作用は價値の變動と二重の關係に立つ。即ち、價値は「人をして其思惟する交換を行ふに至らしめたる需要供給の關係の表現にして、又此價値は將來の交換に於て需要供給の享受す可き制限の原因を爲すものなり」と云ふのである。是れ價値の一般的變動の一進一退の眞相である（Courcelle-Seneuil: op. cit. t. I. p. 232: Rambaud: Cours d'économie politique, t. I. pp. 260-264,—Turgeon: op. cit. pp. 442-447）

三十二

佛蘭西に於る經濟價値論發達の徑路並に其現在の趨勢は大樣縷説の如し。而して吾人は其全過程を通覽し脈絡一貫終始不變の思想が、畢竟左記の四大源泉より發せるを見る。效用、稀少性、被交換性、及び此三者を一語に包括せる被希求性 désirabilité 則ち是れである。故に爰に諸家の見解を此四項に壓縮して結論に代へ度いと思ふ。

價値の觀念は先づ效用を前提とする。效用は吾人が其諸欲望と諸物との間に樹つる適合の關係である。吾人が其欲望の孰れか一に適應すと判斷し、是れに依つて滿足を享得する所の凡ゆる物は效用を具有する。此適合性則效用に依り凡ゆる物は價値を體得する。之を所有し之を保存する者には使用價値を、之を賣却又は購買せんと欲する者には交換價値を發生する。

一物の效用が或は顯現し或は消滅するに從ひ其價値も或は顯現し或は消滅する。又同一欲望に對應する二物の内、吾人は其充足に一層好適なりと思惟する物、換言すれば一層大なる效用を具有する物に一層大なる價値を賦與する。

要之效用は吾人が諸物に認知し賦與する相對的性質にして、是れ效用を價値の「質的要素」élément qualitatif と稱する所以である。

效用は欲望と物との適合關係なるが故に、其は總ての關係が然るが如くに、主體と客體を有す。主體は欲望を感受する人間、客體は此欲望に應ずる物である。而して吾人は效用を人間の側に於て考ふる時主觀的と云ひ、物の側に於て考ふる時客觀的と云ふ。此效用關係の二項は固より全然分離し能はざれども、價値觀念に及ぼす影響より云はゞ、價値を認識判斷する人間の方が價値を體現確保する物よりも、一層有力である。換言すれば價値は客觀的よりも寧ろ主觀的である。

吾人の日常恒久の欲望に對應する諸物に就きては、萬人一致是れに普偏的重要性を與へ人類の判斷は傳統的に是に繼續的效用を授くるが故に、吾人は往々其價値は吾人の私的欲望吾人の個々の評價に依る以上に、寧ろ人類の合理不斷の欲望に對應する是等諸物の根本的性質に倚賴するものと思惟し勝ちである。然し此は迷妄である。其價値は依然各人の主觀的判斷を基礎とし、偶々數世紀に亘る習性に依り社會的性質を强めたるに過ぎぬ。剩へ斯かる見解は吾人を導いて效用と共に價値を客觀化し、價値は曾に諸物の自然的性質と不可分なりと云ふに止らず、更に之を人間個々の意見と無關係なるかの如く

解釋せしむる危惧がある。又事實萬人の認めて效用ありと爲す物の價値を「內在價値」Valeur intrinséque と呼ぶ者あれども此は失當である。蓋し諸物の效用は隨つて價値は關係の觀念を包含するが故に、例へば色彩輕重と云ふが如き物理的性質に全然之を閉ぢ籠める事は出來ぬ。效用を基礎とする價値は、人間の心意が外的財と內的欲望との間に設くる連鎖の觀念である。其判斷が萬人一致的なると單獨孤立的なるとを問はず、諸物に其償値を賦與する者は人間の判斷である。而して此判斷は其出發點を欲望の感覺中に有してゐる。故に假令價値は其前提たる效用と共に諸物の資質に結合せらるると雖、其は何よりも先づ人間の欲望に倚賴するものである。今日無用の物も人間の心意に依りて明日は有用と爲り、其結果價値を獲得する事もあらう。乃ち知る。人間こそは價値の眞の創造者である。

價値は其第一の前提たる效用の外に、更に稀少性の備はるにあらずんば理解するを得ない。效用ある一物の價値は其稀少に比例して增加し其饒多に比例して減少する。是れ物愈々稀少なれば之を獲得する事愈々困難にして、之を所有する事愈々有利なる故である。其結果無償的效用を與へられたる諸物、換言すれば各人の自由裁量に委する程自然に依りて豐富に提供せられたる諸物は、毫釐も價値を構成せぬ。價値は唯だ有償的效用換言すれば其量制限せられ、之を生產するに人間の勞働を要する諸物の效用にのみ限局せられる。乃ち效用を價値の質的要素とすれば稀少性は價値の量的要素 élément quantitatif である。

乍併經濟的稀少性は單なる數理的稀少性ではない、其效用を剝奪せられたる諸物は如何に其量微々たりとも、經濟的には稀少なりと云ふを得ない。價値の要素と看做さるゝ稀少性は、生產物の分量が吾人の欲望の總量に對して、權衡を失するの謂ひに外ならぬ。諸物の價値は效用と稀少性との結合の結果である。

加之大なる奢侈品の場合に於ては、他人の所有せざる物を所有せんとする無益なる乍併頻發する欲望の爲に、稀少性自體が效用其物の增加の因たる場合がある。

最終效用說は此稀少性の效用に及ぼす反動的影響を一般化せるものである。即ち物は效用の具備するを俟つて始めて價値を生じ、而して此效用は其稀少の程度に應じて變化する。隨つて效用を前提とする價値も亦た、一物の處理し得らるゝ分量と是れに對應する欲望との割合の如何に依つて增減する。唯だ既述の如く爰に謂ふ所の稀少が、數理的稀少絕對的稀少にあらずして、經濟的稀少相對的稀少なる事の記憶を要するのみ。

此稀少性なる觀念の中に人間の勞働の價値に及ぼす作用をも看取する事が出來る。蓋し稀少性の由て來る所は、望む所の效用を自然より抽出する事が、或は大或は小なる困難を伴ふ故である。一物の存在量が其現實の欲望に對應せざる事を意味する稀少性は、常に或は原料の缺乏より或は所要勞働の過大より或は屢々此兩者の複合より生ずる所の、生產の困難を前提とするものである。乃ち人間の勞働は稀少性を通じて價値に影響を及ぼす。斯くて又稀少性は獲得の困難と不可分の觀念である。

價値は其質的要素たる效用と其量的要素たる稀少性に加ふるに、更に被交換性を前提とする。換言すれば稀少性を具備する效用が、讓渡せられ得る事を必要とする。但此補充的要素は價値の構成要素にあらずして、單に其表現要素

élément expressif たるに過ぎぬ。

凡そ交換の實行せらるゝ以前に於て、交換せらる可き二物は兩當事者に依り、それぞれの效用並に稀少性に從ひ其價値を比較せられねばならぬ。交換價値を以て諸物の「獲得力」と定義する場合と雖、猶ほ效用と稀少性を無視する事は出來ぬ。蓋し諸物に此「獲得力」を賦與するものは、此兩者に外ならざるが故である。凡ゆる交換は二個の願望の比較を意味する。假に此二願望が當事者に取りて同等の强度を有するに於ては、交換發生の餘地はない。其一が他に優越する場合に於て始めて交換は實行せられ、內的判斷は外部に曝露し價値の混沌漠然たる觀念は明瞭に確定し顯現する。畢竟交換は價値觀念を實際に表現し力强く認知せしむるものである。毫も其れ以上に出でぬ。

乍併他方に於て一物が被交換性無きに於ては、之を他に讓渡する能はず之を他より收受する能はざるが故に、社會的なる意義に於ては價値を有せぬ。交換價値は常に讓渡可能の效用、占有可能の效用を前提とする。但此場合と雖必ずしも事實交換の施行せらるゝを要せず、唯だ交換を行はゞ行ひ得らるゝ可能性あらば足る。

要するに價値は交換の以前に存在する事疑ふを得ざる所なれども、然も一物の交換不可能なるに於ては之を確實に認知するを得ない。是れ被交換性を以て價値の表現要素と爲す所以である。

前揭の效用、稀少性、被交換性の三者は之を「被希求性」なる一語に包括する事が出來る。

第一に吾人の希求するは唯だ自己に取りて效用ある諸物のみ。這個の諸物の滿足せしむる欲望の自然的なると人爲的なると、其效用の嚴肅重大なると浮薄些細なるとは問ふ所にあらず。凡ゆる物は其個人的に利用し得る限り、個人的に希求せられる。故に吾人の希求は希求せらるゝ諸物の或は大或は小なる效用を、換言すれば價値の第一の要素を豫想する。

第二に吾人の希求するは唯だ或は大或は小なる稀少性ある諸物のみ。如何に必要至極の物件と雖其過剩に存在する限り、是れに對して希求の念は起り得ない。希求の念の覺醒には物の缺乏を必要とする。蓋し吾人の希求は其飽滿と共に消失するものなるが故に、唯だ或は大或は小なる程度に於て吾人より奪はれたる效用に就きてのみ、存在し得る道理である。希求性は爰に價値の第二の要素を包含する。

最後に吾人の合理的に希求し得るは、唯だ或は大或は小なる程度に於て其效用の交換可能なる諸物のみ。獲得融通讓渡占有の不可能なる凡ゆる物は、人是れに接近する能はず。隨つて常識ある人士は之を希求する事を斷念する。希求性は即ち難易の差こそあれ一の被交換性を、換言すれば價値の第三の要素を前提とする。

畢竟希求性は價値の三要素を完備する。價値は希求性の一語に盡きる。而して吾人は其諸般の希求の中に階級を樹て差等を附するが故に、此主觀的裁斷に從つて諸物の價値も亦た上下する。

佛蘭西學派の大勢は斯くて價値の根源を人間の心意中に發源せしめ、かの「人間は萬物の尺度なり」"L'homme est la mesure de toutes choses" と云ふ古語をして、新たなる精彩を以て再生せしめた。（完）

附記　小論の擱筆に臨み、再三貴重なる資料を貸與せられたる增井教授及び佛語の未熟を補ふ可く屢々助言を寄せたる萩原吉太郎君に、深謝の意を表す。